

特 261

169

神楽歌集

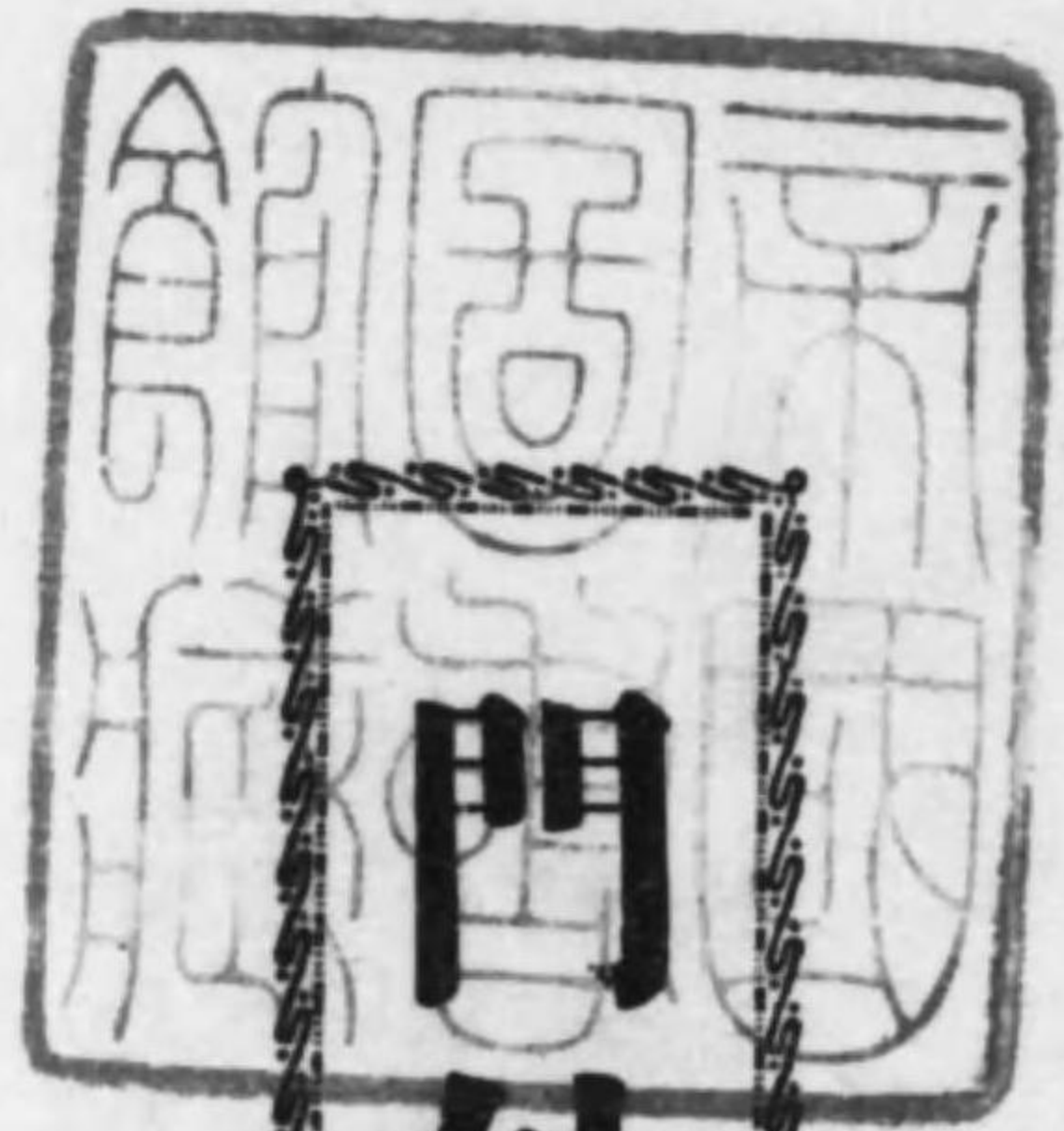
二



始



4#261
特169



門外漢ニ禁ズ



序

此の眞寶五寶典は御本席より河原町初代会長
深谷大先生が頂き、其の高弟に分ちた、原本をそ
の儘印刷したもので金の力で容易も求める事の出
来ない、實に大切な我が御道の生命とする極めて
尊い寶典であります故よく研究して末代の家寶と
して保存せられんことを。

昭和二年十月廿六日

於御地場編輯者敬白

印

真乃

心之

如

印

印

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including a large character that appears to be '心' (heart/mind).

御神樂歌解釋

みかくらうた

あしきをばらうてたすけたまへてんりわうのみこと
と云ふて廿一遍唱へる理は、人間には廿一の悪しき節がある
故に、この廿一節を取る爲めに、悪しきを拂ふてを二十一遍
唱へると云ふなり。

ちよこはなしかみのいふことさいてくれあしきの
ことはいはんでなこのよふのちいとてんとをかた

どりてふうふをこしらへきたるでなこれはこのよ
のはじめだし

と云ふ理は、一寸の事ではない本元の理なり、地と天とを象
りて夫婦をこしらへた、その上世界をこしらへた、拵たこと云
ふ事をよく承知せねば道が分からん、天地の心で出来たる人
間世界なら、天地の懐に住居する人間は、何事も我身心は適
う道理がない、月日二神の心に適ふ、真心一つで何適はんこ
云ふ事なし、人間思ふまゝに自由用なるのは、此の元の理を
聞分けさいすりや、萬の事を神々が守護する、こゆふの心を、
よをし〜と云ふなり。

あしきをばろふてたすげせきこむいちれつすまし
てかんろふだい

この勤め九遍するご云ふ理は、人間は九ツの道具の借物なり、
其借物に理をはかる心を以て勤るなり、又甘露臺と云ふのは、
人間始めた時の親の地場をたのむ事を云ふなり。

眼、耳、鼻、口、手、足、腎、臍、一の道具。以上九ツの道
具。穴部、眼二ツ、鼻二ツ、耳二ツ、腎一ツ、臍一ツ一之道
具一ツ以上九ツの穴あり。

よろずよのせかい一れつみはらせど
むねのわかりたものはない

ご云ふ理は、國常立尊様が先に御出ましに成りて、此の世、人間を御拵へ下されてから、此の世御見濟成され、拵へたる人間に、六臺の根を知りて居る者がないご云ふ事を、胸の分りた者はないご云ふなり。

そのはずやといてきかしたことはない
じらぬがむりではないわいな

ご云ふ理は、面足尊様が御出ましに成りて、國常立尊様が六臺の根を知りて居る者がないご申されたのを、面足命様が、

それは知らぬ筈の事、説て聞かした事がないから知らぬが無理ではないご云ふ事なり。

このたびはかみがおもてへあらはれて
なにかいさいをさきゝかす

ご云ふ理は、是からは神が顯れて、ごんなごともこんな事も説聞すと、國狹土尊様が申されし事を云なり。

このところやまとのちげのかみがたと
いふていれどもとしらぬ

ご云ふ理は、大和地方を他方他國からは神方々々ご云ふて居るが、何で云ふのやら云ふて居るやら元は知るまいご、月夜

見命様が申されし事なり。

六

このもとをくはしくきいたことならば
いかなものでもこいしなる

ご云ふ理は、此の世始めて、ない人間、ない世界を拵た本元の理を、聞た事なら、ごんな者でも懐なる、ご、雲夜見命様が申されし事を云ふなり。

き、たくばたづねくるならいふてきかす
よろづいさいのもとなるを

ご云ふ理は、神の道に就て、此の成り立や未だ其元の理を聞うご思ふ者は、尋ねて来る事なら、萬委細の元の因縁の事を

聞してやろふご、惶根命様の御言葉なり。

かみがで、なにかいさいをこくならば

せかい一れついさむなり

ご云ふ理は、神の道に就て尋ね、聞すのも神が出て聞かしたら、世界中は勇む心に成れるご、大食天命様の御言葉なり。

一れつにはやくたすけをいそぐから

せかいのこ、ろもいさめかけ

ご云ふ理は、助けの道を教へ度から、世界中の心早く勇んで来いご大戸之邊之命様の御言葉が、是れで八柱の神様が、世界の人間に萬委細を説聞かして、何適わんご云ふ事ない様に、

七

御守護下さる事を、一柱の神に、一下り宛納め下さる事を八社様と云なり。

一下り目

一ツ正月こゑのさずけは

やれめづらしい

と云ふ理は、正月とは月様が正しい人間、正しい世界を拵らへ被降た事で、今に年の始りを正月と云ふて居るなり、鏡と云ふは月日兩神之御身の輝くことを鏡と云ふなり、夫れ故に物を寫す物を鏡と云ふ、又餅鏡は天地の理なり、心圓き理なり

り、圓きは正しき理なり。

注連繩は七五三なり、其の七は天神七代の理、五は五倫五体の理なり、三は産で産弘の理なり、又御祝ひする時、一と重ねの餅は、人間に月日入り込んで御守護被降理なる故に、三は三日の祝ひと云ふ、是れは水と火と風との理なり、たべるごき、豆腐は白の心で、四方面面に誠の心を柔かに寫す心なり、又數の子は元々册様が、九億九萬九千九百九十九人の子數を御腹に持ち被降た理、五日は五倫五体の理、六日は六日年越しと云ふは、六臺始りの理、七日七草節句と云ふは、天神七代の理、十一日書初と云ふ理は、大和國人間産弘めに付

き日数の理、十四日年越しと云ふは、人間十五才からは大人
なり、十五日は満月なり、夫れで十四才は小兒の終りのこと、
十五日は満月なり、小豆のお粥を炊いて呼れるは月日の心な
り、かいと云ふのは、元人間は泥海の中より、産れ上りた理
で、小豆のお粥をたべるなり、又こゑのさづけと云ふは、心
のこゑなり、心徹りの授けが出る、世界を思案仕て見よ、物
盗めば夫れ丈けの理が廻る、嘘を言へば人の用いが無い様に
成る理が出る、如才すれば夫れ丈けの用いが無い理が出る、
何事も善悪供に天の與を天より受ける事を、心徹りの授は遁
れぬ事をこゑのさづけと云ふ、珍らしいと云ふのは、善悪は

皆目の先きにつらく、現れる事を珍らしいと云ふ事なり。

一二につこりさづけもろたら

やれたたのもしや

と云ふ理は、此莞爾とは、月日二柱の心の功能の理に叶ふこ
とを莞爾と云ふ、やれたたのもしやは、嬉したのしみと云ふ
事なり。

三ニさんざいこゝろをさだめ

と云ふ理は、人間は毎例も三才心、陽氣の心なり、陽氣の心
とは足事を知る、足る事を知るは陽氣の元なり、何程の物
が澤山でも、慾に限りが無くば氣がいつむものなり、なんば

不自由でも、身の借物を定めて、食ふ事と、着る事とさへ有れば充分と、心を定めれば毎例も心は陽氣なものなり、其の心さへ定めて見れば、身の悩みは更に無し、埃を附けて悩むも、皆足る事を知らぬ故なり。

四ツよのなか

と云ふ理は、世界は四方面の鏡、陽氣の中で住居する人間なれば、陽氣心で暮すのは親神の御定めなり、道なり、其親様の理と道とに叶へば、身の悩みは無し、作りするにも不作無しと云ふ事をよのなかと云ふなり。

五ツりをふく

と云ふ理は、人間は五倫五体と云ふて、五柱の神の體を云ふなり、五柱の神の體を、五倫五体と云ふなり、五常之道と云ふも、木火土金水と云ふのも、地水火風空と云ふのも同様なり、心次第に身體世界も善悪共に、心徹りに皆顯れる事を理をふくと云ふなり。

六ツむじょうにでけまわす

と云ふ理は、人間は六臺の借り物、世界は睦の世界なれば、勝手心で行く道で無し、睦の守護なれば、我が心も睦にして、借物の六臺と睦の守護と此三ツを忘れん様に、人に隔も無き様に近道も慾も高慢もなきよふに、すればごんな事でも叶わ

んご云ふ事なし、此理をむしようにできまわすご云ふなり。

七ツなにかにつくりとるなら

ご云ふ理は、なにごは名は月様のここなり、月様は元の親なり、此の親様が無い人間無い世界を御造り被降た故、又人間に足納をさしたい故、食物ごして野に立毛一切、又魚類に至る迄で、人間の食べ物に御與へ被降て、其の他咲く花も、沸く虫も、皆人間の爲めに元御造り被降て今に至るも不變御守護被降なり、人間も此の恩を不忘して、元始まりの人間の心の通りに、正しい心を離しさいせねば、親神様の御育て被降る物を、何によらず御與へ下さるここを、なにかにつくりご

るならご云ふ事なり。

八ツやまとはほうねんや

ご云ふ理は、此の倭ご云ふのは、小さきに言へば日本の事なり、又大きく言へば世界中の事なり、世界を倭ご云ふ理は、八方の神の事なり、八方の神ごは八柱の神のここなり、倭ご云ふは八柱の神の土地なり、夫れ故にやまご、云ふ、又豊年ご云ふは、善き事すれば善き事が殖る、悪しき事すれば悪しき事が殖へる、依つて善悪供に殖やする理を、豊年哉ご云ふなり。

九ツこ、までついてこい

ご云ふ理は、九は究處の理にして此の理は利き處なり、此の

理を心に定めて何せ斯ふせこは言はん、皆銘々の心を定めて
ついてこいこの咄しを、茲迄で付いて来いご云ふなり。

十どごりめがさだまりた

ご云ふ理は、悪しきは悪しきの道が幾重も在り、其の道を何
んばでも直さずして、十分通り抜けたら、親や吾身は愚か、
兄弟夫婦吾子親類迄で、面を汚こして十方へその名の弘る事
をごりめがご云ふ、又十は十柱の神様の御心に充分叶ふ様に、
心を定むれば、萬ずの事、何叶わんご云ふ事無し、又世界に
十分誠の理の弘かる事は當前なり、親神様の自由用自在の理
を受る事をごりめがさだまりたご云ふなり。

二下り目

ごんくごんご正月おごりはじめは

やれおもしろい

ご云ふ理は、ごんくごは標に榮へる心なり、正月ごは正し
い事をくるめて玉の心なり、踊りご云ふは重り重るご云ふ心
なり、面白いご云ふ心は、ごう云ふ事なら、面白ご云ふ其お
もご云ふは二柱の親神の事なり、しろいご云ふは正しき御守
護被降る御心の意を、面白いご云ふなり。

二ツふしぎなふしんか、れば

やれにぎはしや

二八
ご云ふ理は、不思議ご云ふは、二柱の神様の正しき氣を不思議ご云ふなり、又普請ご云ふは、世界中の人間の心を、人間は神の子なら其の神の心ごかわらん様に洗ふてふきごるご仰しやる事を普請ご云ふなり、其の普請仕上た處へ、神が十分入り込んで自由自在の働きを仕て、十分世界を助けさして、吾身も結構の御守護を受けて暮さうこの、二ツの事をにぎはしやご云ふなり。

三ツみにつく

ご云ふ理は、人間には水ご火ご風ごが三ツ身につく、其の外に身に着く物は、何程物が澤山有共、日々に食ふ事ご、着る事ご丈けより身につかん、此の心を定めて、強慾、悪氣心を無き様にして、正しき日々暮しの心さへ定まるものなら、風ご火ご水ご、毎例も身につくを三ツ身につくご云ふなり。

四ツよなをり

ご云ふ理は、よふご云ふのは夜ふかい始た世界なり、又よふはよき事なり、善心を定むれば、其の心を天地に受取りて、善き御守護を被降る事をよなをりご云ふなり。

五ツいづれもつきくるなれば

此の五ツ云ふは、人間五倫五体を、五柱の神様の御造り被降た事を五つ云ふなり、人間正しき心になる事を、いづれも云ふなり。

六ツむほんのねをきらふ

云ふ理は、六つ云ふのは六臺のお積り被降たる心なり、六臺なれば、何によらず世界は睦に心を盡のは本道なり、本道は往還なり、むほん云ふは六臺の理を知らず、睦の道に外づれる心の働きをむほん云ふ、此の根を伐りて、往還の心を定めて居れば、謀叛の根が切れる、又親様も謀叛の根を

伐る言はれるのは、皆此人間は神の借物、身体は神の自由用なれば、死ぬるも生るも神の心次第成れば、煩いも無、不事災難も無く、逆ま事もなく、世界は地震も、津浪も、雷も、山崩も、大風も無く毎年凶作も無く躰も世界も共に穩かに暮さそうこの事を、謀叛の根をきらふこの事なり。

七ツなんじゆをすくいあぐれば

云ふ理は、難澁には何に丈けでは無い何に付けても眞實の誠心を盡す事を云ふなり。

八ツやまいのねをきらふ

云ふ理は、世界は八方八柱の神の守護なれば、其の八柱の

神様が病ひの抜ける様に、十分御守護被降る心を第一と定めて、日々日を送れば、病ごいふて八ツの埃は無き物なり、すれば病の根は抜ける道理、其の抜る事を病の根を切るふさいふ事なり。

心定めの御話
しの元

九ツこゝろをさだめいよなら

ごいふ理は、此理を聞て、此の心を定めて、茲迄付いて来た心をわすれぬ様に、物事は何に不因、十の物を九ツ迄で仕上げても、一ツ崩れば理を失ふ、人間も心を定めるには、十日の日は九日迄で定めても、一日狂ふたら九日の理を失ふ、又三十日の日は、二十九日迄定めても、一日狂たら廿九日の理

を失ふ、此の理を定めて變らぬ様に定めいよならごいふなり。

十とごころのおさまりや

ごいふ理は、十方十柱の神様の、心が治る此身も修る、世界も治る事を、ごころのをさまりやごいふなり。

正月いちにいき、二にいたり、三にさんざいてをざり、四にしいくりんじつばなし、親の息を懸けて被降て、養育仕た時の授けなり、又正月いちにいきごは御呼吸の授の事なり、此おいきの授けは元子種を泥海中へ、生み下ろし下された時の食物なり。

二にいたりごは煮たりきもつの授け、此りきもつごは萬の食

物の理を一ツに綴めて、りきもつご御授け下さる事なり。

二四

三にさんざいておごりごは、元無い人間捨へるに就ては、足や手のついた人間を捨らへ様ご、親神様が思着れた時の理を下さる事なり。

四にしいくり眞實ごは、他人の煩も、不事災難も、何な難も皆吾が身に引較べて、誠を盡す事を云ふなり。

五ツいつものはなしかたごは、親様の教へ通りの理を守り、ごんなものでも見分けせぬ様にして、眞實に思ふて、惱む人には懺悔さす心の者を云ふなり。

六ツむごいごごばをださぬよふごは、惨いごいふは、人は皆

兄弟ごの心を定めて、飽迄で、人を育て、捨る心も無く、捨る言葉も不言、誠心を離さぬ様の心をいふなり。

七ツなにかのたすけあいごは、何に丈けでは無く、互々の身の助け合を、心に第一ご定める事を、たすけあいごいふなり。

八ツやしきのしまりかたごは、吾家をむつまじく修め、親類を修め、世界ご迄でも敵の無様に、又隔の無様に、心を盡す人をいふなり。

九ツこゝにいつまでもごは、此心を何つ迄でも離さぬ様に、定めてついてくる人の心をいふなり。

十でごころのおさめかたごは、是迄の通り十分何事も外れぬ

二五

二六
様に心を定めて居る者は、所の治りといふなり此人を十の柱
といふなり。

三下リ目

一ツひのもとしよやしきのつとめの

世界の元現れ
たる御話しの
元

ばしよはよのものもとや

といふ理は、日の本といふのはごういふ理なら、元人間も世
界も無い時には、日々といふ事は無き物なり、人間が出来世
界が出来てから日々といふことがあらたまりた故、此理を以
て日さまといふなり、此の人間を拵らへたのは、生屋敷の地

場で始めた故、日の本といふ、又生屋敷といふのは、人間を
始め世界を始めた理で生屋敷といふなり、勤めの場所といふ
のは、何事に不因人間の道を守るに付き學ぶ事をいふ、又此
度勤めするに、無い人間無い世界を拵らへた學びの形するも
此の地場でする事なり、皆此通り始め出す事を此の世の本こ
いふなり。

勤めの御話し

の元々

一ツふしぎなつとめばしようは

たれにたのみはかけねども

といふ理は、此の不思議といふは、二た柱の神様の理を不思
議といふなり、勤めといふは、此つは何んの事なら、皆因縁

の切れる事をつこいふなり、切れるにはごうして切れる事なら、此の世は誠の世なり、其の誠の世で在るのに、萬事の事に誠が無ふて、嘘を言たり、如才したり、人を高低ある様に見分けしたりするから、人に用ゐがなくて捨られる理が生へる、此の理を切るこいふ、此の切れるをつこいふ、又ごめこいふは、何事にも人も我身も隔て無き心を定めて、日々を送れば、皆世界より誠が集まる、此事をごめこいふなり、此理でつごめこいふ、是勤するのは、此地場で此度話を聞して、互ひ互ひに助け合ひの心を忘れぬ様に心を定めさして被降る故に、世の本やこいふなり。

三ツみなせかいがよりあふて

でけたちきたるがこれふしぎ

こいふ理は、皆こいふのは、世上で言ふて居りながら、元がわからん、皆こいふ事はごういふ事なら、世界中の人間はみい様から産み弘めて貰つた理、又なこいふは國常立尊様が、國所は不殘此神の物なり、此の理を以て皆こいふなり、又世界が寄り合ふてこいふは、みな此親様の御守護で御寄せ被降る事をいふ、又出来たち来たるこいふは、其の寄り来る人に誠善心の理を定める人が出来るのを、月日二た神様の理に由つて出来る事をふしぎこいふなり。

匂ひ掛けに理
を知らずとて助
かるゝ仰せ被
降御話しの元

四ツようくこゝまでついでてきた

じつのはたすけはこれからや

ごいふ理は、ようくごいふのは云ふて居ながら理がわからん、ようごいふのは此の世は夜を照し被降る月様が始め、夜から始めた理でようごいふ、此の理を以てようくごいふ、又附いて来たごいふのは、善い事を心で忘れずして日々何んでもご思ふて樂む心をいふ實の助けは是からやごいふのは、是迄での助けは只結構ご思ふ丈けて助けて貰ふたのは匂掛の事なり、實の助けごいふは心得違ひの懺悔をした上で助けを貰ふ事をこれからやごいふなり。

五ツいつもわらはれをしられて

めづらしたすけをするほどに

ごいふ理は、元親様が内の者にも誹られ、又疑はれ、世界の人も笑れて助けを仕て被降た事を思ふて御助けをする心になれば、其の心に乗て、十分の御守護をして被降この、親様の御言葉を云ふなり。

六ツむりなねがいわしてくれな

ひさすじこゝろになりてこい

ごいふ理は、此無理ごいふは、人間はあざない者で、長息がしたい、壯健で暮したい、年々豊作貰ひ度い、又不事災難も

御教祖難難を
知つて御助に
盡力する御話
の元

無理な願ひは
せぬ御話しの
元

三三
無い様に、吾が子も死なん様に、ご願ふ事を無理な願ひと思ふのは心が違ふでな、吾子にこりて思案をして見よ、我子に難儀さそふ困らそふと思ふ親は有ろふまい、由つて無理な願ひごいふのは、ごういふ事なら、他人はごふでも吾さい能くば能いと思ふ心で願ふ心が無理で、其心を無い様にして願ふ事を一すじ心ごいふなり。

七ツなんでもこれからひごすじに

かみにもたれてゆきまする

ごいふ理は、唯何事も近道慾高慢無き様、人を隔る心無き様にして、十分足納の心を定めて、身の内借物を第一に忘れぬ

様にして、眞心で神にもたれるごいふ事なり。

八ツやむほごつらいことばはない

わしもこれからひのきしん

ごいふ理は、やむごいふても、やむ原因は知ろふまい、やむごいふは八方八柱の神を無にする事をやむごいふ、此の神様をむにする元ごいふは、八埃を積り重ねる故に、神を無にする其の理が吹いて、身体に御守護被降る道具衆に意見を受け、身が苦しむ事を人間にしてやむ、病ごいふ、是程辛い事は有ろふまい、心得違ひの無様にして、八ツの埃を積み様に、心を定めて、日々陽氣で暮すを、日之寄進ごいふなり。

病の原因分り
たる御話しの
元

大恩の親を知
る御話しの元

九ツこゝまでしんぐしたけれど

もこの神さはしらなんだ

三四

さいふ理は、茲迄信心する迄は、吾身の内を御守護して被降る神供又世界中の御守護下さるここも又世界中の守護は何に丈けでは無い此の親神の御守護より外には無い事を、是迄知らずに暮して来た事を、元の神さは知らなんださいふなり。
十ドこのたびあらわれた

じつのかみにはさういない

さいふ理は、實は正なり正はたゞしき事なり、正式は誠なり、誠は實なり萬の元なり、萬の元は天理なり其の理が分り又現

れた事を、實の神には相違無いさいふなり。

四 下 リ 目

心の落着く御

話之元

一ツひこがなにこゆをふとも

神がみているきをしずめ

さいふ理は、何丈けでは無い何事言ふ供聞供見様供必ず天理の心を外ずさん様に、心を第一に修めて居るが誠やで、神が見て居るさいふのは、世上世界を眺めて見よ、誠は誠丈け、嘘は嘘丈け、如才は如才丈け、悪は悪丈け、慾は慾丈け、其の人の心通りに理が有るやろふ、親の目に慥かに見へてある

三五

發顯は水に洗
れる御話の元

程に、親の目に見落しはせん、善惡供に在ると思へよ、此の
理を以て見て居る心を静めよといふなり。

三六

一二ツふたりのこゝろをおさめいよ

なにかのこゝともあらはれる

二人の心ご云ふのは、月日二親の心に、又夫婦の心を修る事
なり、何かの事もご云ふは、何に付ても萬の事は皆顯れるご
云ふ、其の筈哉何程汚れた物でも、水で洗ふ、人間も心を水
で洗はれるご云ふのは、月様は國常立之尊様なり、其の神様
は此の國の親神なり、夫故に國所を見定め之故あらはれるの
は當前なり、此の理に由つて、何かの事も顯れるご云ふなり。

三ツみなみていよそばなもの

かみのすることなすことを

天の親神御守
護に違無いと
思ふ御話之元

ごいふ理は、皆見て居よ側な者にて近所隣の人計りでは無い、
世界中の事なり、世界中側ご云ふのは、双方くるめての事を
側ご云ふなり、神のする事なす事ご云ふのは、ごういふ事な
ら、何事によらず思案して見よ物を作るにも目に見えんのに
生へ出る、延る、花が咲く、實がのる、實がいる、赤らむ、
又人間もごうせいでも出来るごいふは、宿る、産み下ろす、
成人するのも同事、又ごうせいでも悩むのや、死ぬるのは人
間心ではいこうまい、又世界も同事、ごうせいでも寒うな

三七

る、暑うなる、風が吹く、雨が降る、夜晝の分ちの在るのも、
皆人間の業でなし、是等の事を見て居る側な者、神のする事
成す事を云ふなり。

四ツよるひろごんちやんつごめする

そばもやかましうたてから

云ふ理は、夜晝云ふは月日の事なり、夜でも晝でも、身
の惱みには勤めする、又作りにも、虫扱ひの勤、又生出の勤
め、稔の勤め、悪難除も疱瘡せんよふの勤めも、是れ皆それ
くの理が在る、其の理を知らぬ者は、喧ましい憂たて可笑
しからふ、人の笑を神が樂しむ、萬ず勤めの通り守護するこ

云ふ事なり。

五ツいつもたすけがせくからに

はやくよふきになりてこい

云ふ理は、陽氣云ふのはごう云ふ事なら、足納心を知る
事なり、足納心を知る事は、足る事を知る事なり、足る事を
知る事は、唯身体の借物を知ることなり、身体の借物を知れ
ば、何んば大きな身代でも借物、何んば上の物でも又見るに
見られん難澁な者でも同じ兄弟、實の兄弟なれば捨て置く事
は出来まい、可愛想な氣の毒哉ご思心丈けでも月日は厚く受
取この御言葉、唯此の心を定めて、日々暮の理が第一、此の

善心陽氣之心
成るは足納が
元たる御話し

心を迅く定めよ、其の儘直ぐに早く助け度いこの事なり。

六ツむらかたはやくにたすけたい

なれどこゝろがわからいで

ごいふ理は、村方ごいふ理は一に地場の村方の事なり、此の親様を近しい思て居る故に、同人間心の様に思て居る故に、夫れ丈けの理が無いごいふ事なり、又二ツには世界中の村々の方も、其の通り、疑ひ心が有る故に、自由自在の理が無く、又三ツには皆銘々の身体も同じ事、心が揃わぬ故に、夫婦でも親子の中も兄弟も皆銘々心違ふで、其の心通りの御守護有る故に、みなそれ〴〵に理が違ふごいふなり、又助かる

者ご、助からんものも仕合の能き者も悪しき者も皆心通りの守護に因る、此の理は皆心がわからん故ご、わかる故ご此の二ツの理なり。

七ツなにかよろづのたすけあい

むねのうちよりしあんせよ

ご云ふ理は、何丈けでは無い、互々の助け合いは、人に無物を與へるも助け、人の出来ぬ事をして遣るも助け、人の難を吾身に引受けて誠盡すも助け、又吾身の爲を思不、人や世界の爲め思ふも助け、皆此の世は陰陽なり持つ靠れつの心を定め、第一に胸の内より思案せよご云ふ事なり。

互助合人たる
道の御話しの
元

前につゞく心の勇む御話しの元

八ツやまいはすつきりねはぬける

こゝろはだんぐいさみくる

ご云ふ理は、互ひ助け合ひを心に第一と定めて居れば、身の悩みは無し、不事災難も無し、又何の事でも自由用自在も皆叶事を、心はだんぐ勇みくるご云ふなり。

九ツこゝはこのよのごくらくや

わしもはやくまいりたい

ご云ふ理は、茲はご云ふのは、此所の心定めが、こゝはこのよご云ふ、このよご云ふは、是は此世の理なり、世界なり、心を第一に定める事を、はやくまいりたいご云ふ心なり。

十ドこのたびむねのうち

すみきりましたがありがたい

ご云ふ理は、此教へを聴して貰つて、心を澄した故、胸の内掃除が透かに出来て、何事も十分に御守護下さることを有難いご云ふ事なり。

五 下リ目

一ツひろいせかいのうちなれば

たすけるところがまゝあるふ

ご云ふ理は、世界中に助ける所ご云ふは、何う云ふ所なら、

御道眞に疑ぬ
者には神の自
由用第一の御
話しの元

身の悩みには、醫者も薬も助ける所、拜み祈禱も助ける所、
禁厭も易判断も助ける所、諸神諸菩薩の参り所も助ける所、
其敷在る中に眞ご助ける所は此所よりなし、此證據云ふは、
帶屋疱瘡の許し出す、是れは此の世の人間を始め出したる屋
敷の證據助け、又世界を始め出したる屋敷の證據の道明に、
助道明被降事を云ふなり。

一二ツふしぎなたすけはこのところ
おびやほうそのゆるしだす

ご云ふ理は、前に言ふて在る通り、帶屋疱瘡の許し被降理を
思案して、眞の親神様や、親坐やご、思ふ心の違わん様に、

眞實思ふ事なら、親の諭しの通り疑なく、心の行を付けて、
日々の日を陽氣に定めば、帶屋は素より疱瘡は第一の大節な
り、此の元の大層な事が助るなら、何に付けても元が叶へば
身の内一條は心次第で、何に叶わんごいふ事はない、篤ご悟
りのつく者は、第一神の自由用在るなり。

三ツみづごかみごはおなじこと
こゝろのよごれをあらいきる

ごいふ理は、水は神なり、神は水なり、水は素直な物なり、
素直でも十分の徳が有る、其の人間は神の子なり、人間は亦
其の神より勝りた素直で無くば自由川叶ふ筈はなし、夫れに

人間はあざない者で、神の子で有りながら神の心に従はず、
して、神を下た目に見る様な勝りた心を持ち、吾身ほしいま
ゝに、近道、慾、高慢、悪氣、強慾の心を先きに立て、親ご
水ごの心に成らぬ故、親の守護は在る筈は無し、此理思案し
て神ご水ごの心に捲かれる物は少しも無し、此の理を素直な
水ご神ごで、此の度攻め切る事を心の汚れを洗ひきるごいふ
なり。

四ツよくの無いものなけれども

かみのまゝにはよくはない

ごいふ理は、此慾ごいふのは何丈けではなし、物の欲も慾、

惜も慾、隔て心も慾、嘘追従も慾、高慢も慾、怨みるも恨ま
れるもみな慾、日々に心の變るのも慾、案じるのも慾、先の
思案も慾、人間は皆月日二柱の心にさへつななれば月日には
唯一條の世界を育てる心計りなり、其の心になれば二親の心
に適ふものなり、此の事を神の前には慾は無いごいふなり。

五ツいつまでしんぐしたとしても

ようきづくくめであるほごに

ごいふ理は、いつまでもごいふは人間五倫五体の姿なり、い
つまでもごいふは五体の理をいふなり、眞實ごいふのは誠の
心なり、誠ごいふのは世界一れつ兄弟の心を定めて、見分け

眞實の眞心の
陽氣つくめの
御話しの元

惨い心を忘れ
て優しい心に
改良の御話し
の元

無き様に口も心も違はん様にする事を信心ごいふ、又其の同
じ真心する中にも、心次第で理に隔てがつく、此隔てはめへ
くの心次第に理が分かる、理が分れば咄しも眞實に聞く、
聴けば聞程胸が分る、分るに應じて理が入る、其理に應じて
實がのる事を、陽氣づくめで有る程にごいふなり。

六ツむごいこゝろをうちわすれ

やさしきこゝろになりてごい

ごいふ理は、此の惨いごいふは、天理にはづれ理に無い事を
惨ごいごいふなり、此の理に無い事ごいふは、何事によらず
世界兄弟の理を外して、人はごうでも吾れさい能くば能い

この心は、天の理に無い事なり、又優しきごいふは、此の世
は八方八柱の神の御守護なり、此神の心に叶ふ心に定めるの
が世界のしきなり、此理を以てやさしき心になつてごいごい
ふなり。

七ツなんでもなんぎはさゝぬぞへ

たすけいちじよのここのところ

ごいふ理は、なんでも難儀はごいふのは、人間皆何事も心か
ら難儀するなり、其の心ご云ふのは、吾身大事と思ふて其實
吾身を捨てる事はかりの心の種を蒔く事なり、實に吾身を大
事と思なら此の地場は人間世界を始め出したる所なり、ごん

なここでも皆教へる事を聞定めて、懺悔をして心を澄すこと
なら、何叶はんさいふ事なし、是れを助け一條の此の所さい
ふなり。

國と名の付き
し御話しの元

八ツやまとばかりやないほどに

くにぐまでへもたすけゆく

此國々は、何の理で國さいふなら、人間は皆、九ツの道具の
借物なり、其の夫婦をくにさいふ、其の夫婦に人間を宿し下
さる故、人間が廣る、その人間の住む所を九二さいふて、其
の九二九二を助け行くさいふは、人間の身上を助けするのを、
九二くさいふ、又世界中も、皆天の理で教を弘めて助けす

る事をいふなり。

九ツこゝはこのよのもこのちば

めづらしところがあらはれた

さいふ理は、人間世界を始めた元の地場、又人間には神の教
を聞きて心の地場を定める事をいふ、又珍らしいさいふのは、
人間を始めた屋敷を知らして貰つた事、又無い人間無い世
界を始めた萬づの元を知らして貰つた事、又咄一條でござんな
事でもみな助かる、悪しき事もなみ顯れる事を、珍らしい
事が顯れたさいふなり。

どうでもしんぐするならば

こうをむすばやないかいな

さいふ理は、こうは心のこうなり、其こうを結ぶは講社を結んで、御話しの理を聞いて、心を研て、其の心を定めて、一ツの功を立て一つのこうを貰ふ心、楽しむ事を講を結ぶさいふなり。

六 下 リ 目

一ツひこのこゝろとゆふものは

うたがいぶかいものなるぞ

この理は、此疑ひさいふのは、吾身の知らぬ事を思はずして、此の教を本真にせず疑ふて暮す心が深い、何事も人間の始り、世界の始りの元は知ろふまい、其の理を論して十分の助けさそご思ふ月日の心配を、人間心で嘘ご思て、吾身の体の損を招く心が氣の毒やさいふなり。

一ツふしぎなたすけをするからに

いかなることをもみさだめる

この理は、此不思議ご云ふのは何事も木は節から芽を開く理なり、ふしぎは二柱の神の義なり、此の二タ柱の義の知らぬ事なし、人間はみな月日二タ柱の心のさいふつなり、如何な

悟り論しの御話しの元

悟り論し鏡の如くに寫る様に成る御話しの元

る事も見ざるなり、又人間を助けするにも、悩む處で其の人間の心を見定め理を受るなり、此事を如何なる事をも見さだめるこいふなり。

五四

三ツみなせかいのむねのうち

かゝみのごとくにうつるなり

この理は、皆こいふのは、人間は元み様より産み弘めて貫た者なり、なこいふは世界中は國常立尊様の物なり、此の二つの理をみなこいふなり、鏡の如くこいふのは、月日二神の世界なれば見ざる處はなし、又人間も助けするには悩の理で、其の人の胸の内鏡の如くに寫るでなこいふなり。

四ツよふこそつこめについてきた

これがたすけのもとだてや

この理は、つこめこ云ふは、つは切るなり、こめは何事も世界中を切れぬ様に繋ぐ事をこめこ云ふなり、此繋ぐ理は誠が無くてはつきが出来ぬ、誠は世界に隔無様に近道も慾も高慢も無い様にして世界中は互々の助け合ひ、吾身さるよくば能いと思ふ心の根を切りて其日くの足納して情心を第一として、世界中の人間を神と崇める心を第一に定めて暮す事を繋ぐこ云ふなり、すれば人も助かる我が身も助かる事を、助けの本立やこ云ふなり。

五五

五ツいつもかぐらやてをどりや

すゑてはめづらしたすけする

この理は、いつこいふのは五倫五体也、神樂や手踊りやこいふのは、無い人間無い世界を拵らへた元の雛形をする事なり、末では珍らし助けこいふのは、今の悩みの助けだけではない、末の助けは眞實次第で、病ず天死ずに弱り無き様の道で、又百姓は肥の授け、又帯屋自由用早め成り供延し成り供、子は望み通り、男なり供女なり供、又痲瘡せん様の請合の守り、又甘靈臺の上で勤めに懸て人間に心次第で授け様この吐し又何所へ行け供小使もいらす、人に難儀さそろにもさし様の無

い様又仕様にも仕様の無い様、風は何つでもそよく風で、世界の金氣水も澄して、咲た花にはかほりを付けて、暮さそろうこの事なり。

六ツむしようやたらにねがひでる

うけとるすじもせんすじや

この理は、唯頼みだけでは皆頼む成れ供も、人間は皆銘々に心違ふ、其の心を受取る中に、悪しきの中にも善があり、善の中にも悪がある、溫和にしても埃の深い者が有る、此の理を見分け聞き分けて神にもたれる様、人間はあざない者で天の理を知らず、故に其の理に由つて利益の有る無し道が有

御道の聞き様
と日々の行ひ
が違て有れば

る、ごんな善き人に見ゑても、天の理に外れる人は皆悪しき
やで、此の理ごういふことなら、悪き人でも仕合の良き人有
り、良き人に見ゑても心違ひの埃が顯れる、又此の道は何ふ
云ふ者なら、物惜み深きも有り、欲い者も有り、心悪き者も、
嫉心深き者も有り、案じ心の深き者も有り、隔心の深き者も
有り、日々心變る者も有り、又神心するにも神様を頼む丈け
の者も有り、又真心する中に眞實に話を聞て、懺悔をして、
心を定める者も有り、其の心徹り受取る事を千條と云ふなり。

七ツなんぼしんぐくしたとて

こゝろへちがいはならんぞへ

五八

願て居ても眞
實に成らぬ肝
要の御話の元

信心する中に真心の心得が第一なり、道を知らずに信心して
は何にもならぬ、此理を第一に心得て願ふら、誠の真心とい
ふなり、誠の真心といふのは、まこと一ツが第一なり、人間
の理は世界兄弟を誠として、嘘、追従、慾、高慢、隔心無き
様にして、人間は皆互々の心を眞といふ眞といふは其真心を
生涯外づさぬ様にするが眞といふなり、此の理に外れて、吾
身さへ能くば善いと思ふ心を元として、神に願掛るのは、吾
身の食い物を辛勞して作るも同じ事なり、此の理を心得違ひ
はならんぞへといふなり。

五九

八ツやつぱりしんじんせにやならん

こゝろあちがいはでなをしや

矢張ごは、八柱の神の理をはる事なり、其の眞心ご云ふのは人間心の無き様にして、世界兄弟、又世界は一ツ、根は借物、田地田畠、山林、金銀も、人間の力物、立毛も、皆世界中の物ご心を定めて、日々眞心ごいふなり、今迄では人間心で唯躰の悩みを助けて貰ひ度いご思ふ計りの心は、信心の道に外づれる事なり、心得違ひの眞心は御利益が無い、元の眞の心に成れば御利益が有る故、是非に迫りて誠心に成る事を、心得違ひは出直しやごいふなり。

善を行ひ陰徳積たる後心にて戻さぬ御話しの元

九ツこゝまでしんじんしてから

ひこつこのうをもみにやならん

茲迄でごは十のもの九ツ迄で積んだ理なり、又眞心してからはごいふのは十を九ツ迄でも懺悔をして定めを着けた事なり、又十に一ツの利が外づれても一つに歸る理、其理の迫りをいふなり此の事は何丈けでは無し、内々も三十日の内廿九日迄で睦間敷く暮しても、一日のみで、三十日睦間敷暮した理が戻る、又人に物施しても惜しむ心では戻る、又恩を着せる心でも戻る、又人に譽められて人を見下げる心有ても戻る、此戻る心の理を外すさぬ様に心を定めて、暮す心を、一つの

功をも見にやならんといふことなり。

十ドこのたびみゑました

あふぎのうかがいこれふしぎ

この理は、さうごは十分といふ事なり、十分は十柱神様の事をいふ、扇は大氣の事なり、大氣な事を眞一つの心で大きな事を扇で論じて貫ふことをいふなり。

七下リ目

一ツひとことはなしはひのきしん

にをいばかりをかけてをく

一ト言話は日之寄進句はちよいこの話しはちよいご丈け自由見せる事を云ふ、唯何事も此の道理、蒔た丈けの種は生る、此理を思案して何事によらず、深く心を定めて、良き種を蒔く心を第一に定めるなりといふことなり。

二ツふかいことゝろがあるなれば

たれもこめるでなほごに

此深いといふは、二柱の神の理をいふなり、此神様のお話しの通りに慎する事を止めるといふのは、何ごも其の者の心を妨げることを止めるといふ理、亦其の者の心を笑ふ者も、誹る者も、皆止めるといふ、亦此の道を止める心で居る者は、

世界から成程
の者や成程の
人哉と言はれ
る様に成る御
はなしの元

吾身止まる道が在る、亦進めば供に吾身も稔道が有、此理を
止めるや無い程にさいふなり。

三ツみなせかいのこゝろには

でんじのいらぬものはない

田地とは、人間が物を作る處を田地といふ、其の田地なら誰
でも欲がる、田地が有りても、人間は息が無くは何んにも成
らぬ、神様の田地は、世界の人間の誠の心を田地といふ、誠
の心で蒔た種は、これ丈け稔りするやら分らん、誠一ツは柔
い長い堅い切目無い實やで、其實を取ろうと思ふなら種は皆
味いは知れまい、世界中から成る程の人や、成程の家やと言

はれるのは、此れ自由自在の元なり、天の理なり、眞で生
る種は、田地求める金銀もいらす、心配もいらす、物種もい
らず、年々の不作も無く、吾身に於て煩も無く、愁いも災難
もなしさいふ、充分大きな種は心の誠一ツであるのやで、此
の理を思案して田地を求める近道は後にして、心の誠の田地
を先にして、いつく迄でも減らぬ様の自由自在の物種が、
世界中から水の湧く如く柔に切目無き様の實をさするさいふ
ことなり。

眞この行に價
ひをたつぶり
被降る御話し
の元みなに分
り易き御話し
の元

四ツよきちがあらばいぢれつに

たれもほしいであるふがな

良き地は誰れでも欲しい心、人間の地は物を作る處、神の心の地は世界中人の誠心の地を望む誠心は大きな者、人間も誠心を望まん者は有るまい、誠心を望みながら、吾が身の誠を盡さず、誠を盡す事を嫌ふて、世界に誠が有る筈はない、世界に誠がなくても、吾心に誠があれば、みな世界から誠が集る、良き地がありても、種を蒔ねば生る理があろふまい、世界が誠でも、吾心に誠が無くば、良き地に種を蒔かぬも同じことなり。

如何なる良き
田より勝る心
と成る御話し

五ツいづれのかたもおなじこと

わしもあのぢをもとめたい

此の何れは、何處の人でも同じこと、良田地は望まんものはない、其の田地は、金がなくては求められんと思ふ心は誰でも得心して居る、又人間の誠の良き地は、誰も望まんものはない、此良き地は金銀はいらぬ吾心のまこと一つで世界中の誠の心を皆受取ることは違無し、又天理も大きに十分に叶ふに間違なし、夫れに人間は、あざない者で金銀は入らぬ、吾身の胸三寸で誠出すことを嫌ふて天理の大き成る眞の實を取ること知らぬ、此の理を胸のうちより思案して、何事も

御話し聞分け
世界を眺めて
思案するが第
一之御話

見分聞分け、誠の種は大きな元と云ふなり。

六八

六ツむりにどうせとゆわんでな

そこはめいくのむねしだい

此の理は、心に無い事を無理に何制斯制とは言はん、銘々の
心で思案して、善いと思事は思儘にするが能い、神も其心徹
りの守りする、思案して見よ、何程悪人でも、身の自由用は
仕して居る、差して居る心は同じ親の心やで、親の心は變ら
ねども銘々の心通りが現はれて、善は善丈け理がある、嘘は
嘘丈け、隔は隔丈けの理が現れる、口先上手は鈍いふ實が
のる、此の理が世界に現れ、天に寫る、銘々に此道を思案し

て、我が心のすいた種を蒔けと云ふ事なり。

七ツなんでもでんちがほしいから

あたゑはなにほごいるこても

何んでも田地が欲しい心で金銭拵らへる心は強い、是れが皆
埃りの元や、金銭拵らへる心の元は、欲しい惜しいが第一の
元、是が月日第一の嫌い、此の理思案して見よ、埃がたまれ
ば身が悩む、愁災難皆招く事なり、金欲しくても、身體悩ん
で其の上愁重りては、金の出来る事無し、有金と田地と耗る
理に成る、皆運は天に在る物なり、天に在る物を受るには、
真心より受るなり、天運を受るには誠が第一なりと知るべし。

六九

八ツやしきはかみのでんぢやで

まいたるたねはみなはゆる

き

此屋敷云ふは、此の世云ふも同事なり、此の世は八方八柱の神の御守護なり、其の内の地を田地云ふ、金錢に心を寄するに及ず、心の誠で何事によらず人の爲世界の爲めに心を盡して思案して蒔たる種は皆生へる、生へる云ふは世界中は八方八柱の神が守護して居る故に、誠の種の價で八方より生やす云ふ事なり。

九ツこ、はこのよのでんぢなら

わしもしつかりたねをまこ

此の理は、善惡の理を思案して、誠一ツの種は大きな物、我身思案の慾の種はなんぼうでも小さい成る理なり、誠で蒔種は、何んぼとも分らん大きな稔りする事、眞實に心の定まる事を聞分けるといふの理なり。

十ドこのたびいちれつに

よをこそたねをまきにきた

たねをまいたるそのかたは

こゑををかずにつくりとり

此の世界中は段々此の理を聞分けて、誠一ツに心を定めて來る者には、一寸視へる、今の處でも、身体に惱は無く、作

七一

立毛も不作無し、世界の人の用ゐは深く、何處へ行く供金せに錢も不入、世界より成る程の人や、成る程の家やこ、言われ理が生へる、是を作り取りこ云ふなり。

八 下 リ 目

一ツひろいせかいやくになかに

いしもたちきもないかいな

廣い世界に人間は悪氣の中なら、誠一つの心を定める者は有るまいと云ふ事を云ふて有る、其の悪氣の中から、神の守護で、眞の種を曳出す、先きを見て居よ、世界の中からごんな

まここが出る供知れんこ云ふ事なり。

一ツふしぎなふしんをするなれど

たれにたのみはかけんでな

御道の礎柱と成りて尊敬を稟る御話し之元

此不思議とは、物の節の事を云ふ、皆何事も節から芽の出る事なり、人間も胸のふしんこ云ふ節があるので、誠心の理を定める、又理を定めるには咄を聞く聞くに應じて道が分る、道が分れば心が誠一つに定る、其心を石(意志)と云ふ、又其心でどこまでもふんばる者には人は敬ふ、是を立木と云ふ、此の種は、どこから出ると思なら、此の世始めた親が出す、ごうして出すと云ふなら、病む程辛い事は有るふまい、夫れ

を話一條で心直す者が在る、是が一つの種と成る事を云ふなり。七四

三ツみなだんぐとせかいから

よりきたことならでけてくる

皆世界から、病むと云ふ辛さを節として、寄り来る人に、話を聞して助けする、此助かること云ふ節で懺悔して、又心を切り接ぎすること云ふを心がだんぐと出来て来ると云ふて在るなり。

四ツよくのこゝろをうちわすれ

こくこゝろをさだめかけ

慾は第一神の残念なり、此慾にも色々在る、金銭や山林や田地を望む計りではなし、皆銘々に思案して見よ、人間は息も身も神の借物なり、吾身の物は吾の心より外になし、人間は日々食ふ事と着る事さへ與へて貰へば充分結構と、足納して暮すのが理なり、夫れを知らずして、皆人間は何依らず慾を云ふ、腹の立つのも慾、人の事を云ふのも慾、日々心の變るのも慾、隔するのも、追従言ふのも、人の事を笑ふのも、骨を惜むのも、親に不孝も、兄弟に愛敬薄いのも、人を棄てるのも、皆思案して見よ、元は欲惜一つの種より生へるものなり、其の心を速に切り接ぎして、誠一つに定め居るようこの

月日之御心に
叶へば何にか
も自由用之出
来る御話しの
元

事なり。

五ツいつまでみやわせいたるとも

うちからするのやないほどに

何つ迄で云ふのは、人間心で、先の思案は何つに成りても
いらんもの、何つ迄でも神の守護なり、人間の心を定着ける
のが第一の物種なり、人間は何事にも皆月日兩神の論にま
かれる心が第一の物種、此の理を思案して見よ、人間の体は
皆月日の借物、ぬくみすいきは皆日様や月様の出入、身体自
由用は皆月日の働き成れば、世界も皆月日の守護なり、立毛
も咲く花も、實も、沸く虫も、是れ皆月日の自由用なり、人

急ぐ理はをく
れると云ふ御
話しの元

間も誠一つで月日の心に叶ふ者なれば、身の内は申に不及、
世界中の自由用は人間心では出来ぬ事を云ふなり。

六ツむじよやたらにせきこむな

むねのうちよりしやんせよ

是れは神の眞心をするに、無性に慌てこまんよふの御言葉な
り、唯神を眞心するにも、結構や有難いと云ふ計りでは何に
も成らぬ、此道を篤ご思案して、咄を聞て其の理を堅く定め
る者なり、是は皆何事でも世界中は理で責めたるものなり、
人間も皆月日の理で出来た者なり、其の事を皆思案して見よ、
人間も世界も皆理が元なり、其元の理がごう云ふ理なら誠一

心と口と違ふ
は第一神の殘
念と云ふ御話
し

つが天の理世界の理人間の理、何事も急くな、騒も驚きもせずして誠一つの道又幾重の道も在る、此の道の次第のここを段々こ、元の元まで咄を聞いて定めよと云ふ事なり。

七ツなにかこゝろがすんだなら

はやくふしんにとりかゝれ

是は此の道の理を聞、元を訊て分りた上は、早く胸の掃除をするが第一なり、物が分りても胸と口とが違ふては第一の神の殘念なり、其心を銘々に入れ更へて神にもたれる心を思案せよと云ふ事なり。

八ツやまのなかへといりこんで

いしもたちきもみておいた

山ごは此神の事を知らん世界並の人間の事を云ふなり、其の中に石も立木も在ると云ふのは、誰でも我身の体を惜まぬものは無いから、夫れで此神に願ひを懸ける、神の理を聞く、聞に應じて懺悔が出来る、心が定る、其の定めた心の眞實を、石も立木も見て置いたと云ふなり。

九ツこのきさきさうかあのいしと

おもへどかみのむねしだい

人間は心次第で神の用向に使ふと言ふ言葉、又石も此世の助

心次第で神の
用木を妨ぐ者
は月日退く御
話之元

け道の根石にこの事、是皆銘々の心次第、此の木ご云ふても
伐られるにも伐られ様がある、悪氣も強慾も又此神の道を潰
そうご思者も、是れ皆悪の大木なり、此の者は眞の心の者の
蔭をする心に當る故に、是れは伐り倒すこの事は在るご云ふ
のは月日退くご云ふ事なり、又石も同じ事、何んば言ふても
質太懺悔せぬ者は、誠を附ける道の妨げに成から、月日退く
ご云ふ事なり。

十ドこのたびいられつに

すみきりましたかありがとうございました

ごうごは十分十分ご云ふ心なり、十分澄み切つて見れば、何

事も十分の自由用が世界で出来る、又身の内も十分の自由用
が叶ふ、其れを有難いご思ふ心を、胸の中に定まると云ふ事
なり。

九 下リ目

一ツひろい世界をうちまわり

一せん二せんでたすけゆく

此の理は、人間心一つの働ご心の誠を云ふ、奉公するにも、
職働きするにも、定めの錢より一錢二錢がご程誠働けば、
世界から皆一列に人氣が集る、手廣い世界を打ち廻りて働く

八二
にも体が忙しい、又定めた錢より誠が無ふて骨惜みすれば、
世界に望み手が無ふて世界を打ち廻りて苦勞する道が現はれ
る、是皆何によらず心の誠一つに寄る物なり、此の理を思案
して何事によらず名を失ふのも身の光るのも、善惡の心一つ
に止まる物なり。

一ツふじゆなきよにしてやるふ

かみのこゝろにもたれつけ

不自由は物の無き事、神の心にもたれ付くのは、神は正直
ゆへ心は眞心、すなをな心一筋ゆへ人間も此神の心に叶ふ
様に、心を研いて、もたれ付けば、何に叶はんこ云ふ事なし、

神の心にもた
れ着けば不自
由難儀無き御
話の元

するで十二分云ふのは皆我が心で蒔く種やで、此の事を世
界中を見分け聞分けして思案して見よ、人間は皆神の自由用、
世界も神の儘なり、其の證據には、人間の吾身思案がたより
に成れば此の世で病む者も、死ぬ者も、貧に暮す者も此の世
には無し、何んな難儀して暮すも是は皆神にもたれずして、
吾身の心にもたれる故に生へたる種なり、此事を眞實心改めて、
神の心にもたれ着ば、何程の悪人でも、一夜の間にも心入替
へて願はば、ごんな難儀も、身の不自由も、皆助けるご云ふ事
なりご知るべし。

天之理人間の
力で及ばぬと
云ふ御話の元

三ツみればせかいのこゝろには

よくがまじりてあるほどに

慾は皆人間心で、吾身大事と思ふ心は皆な慾、世界中は水と火と風此三ツが元なり、人間も世界も立毛も咲花も沸く虫も皆此三つの元より成育するものなり人間心で子が出来るものでなし、又人間心で子の成人が出来るでなし、又立毛も人間心で生へるでなし、延るでなし、花咲くでなし、實がのるでなし、湧く虫も、生へる艸も、人間心で生へるでなし、夜と晝との區別も皆人間の及ばぬ事、月日の自由用なり、此の元を思案して、自由用出来る親神にもたれ、心澄して陽氣一つ

人の難儀を憐
みざれば吾身
の難儀と成る
御話し之元

にもたれるが第一といふなり。

四ツよくがあるならやめてくれ

かみのうけさりでけんから

慾は何によらず皆めへくの吾身思案を慾と云ふ、此の世は四方面の世界なら四方面も此の世始めた月様が元と夜から始めた理で此の世と云ふ、四方と云ふも、世界と云ふも同事、人間はあざない者で元が分らん故に此世に住み乍ら此世の元を知らず、夫故陽氣の心を外づす、又四方面の理も同じ事、吾身に知らぬ故四方へ誠心届かず又四方の人の難儀をも難儀と思わず、又ごんな心で居る人も皆是れ月日の同じ借

八六
物の体なり、人間は其の世界一つの理を知らぬ故四方の爲めに
ご思ふ心は更に無く、我爲め計りを思ふ故、四方にも亦た
我れに誠盡す者は無い故、此の世に住み乍ら四方の理が迫り
て我身に迫る故惱みに迫り込む、夫故に咄を聞て懺悔の道に
迫らにや成らぬご云ふ事は、皆此の元の理も無く吾身の心を
勝手に元ごして、身の自由用を出来るご思ふ心から蒔た種が
吾身に生やしてせつなみをする皆是吾心の種によるご云ふこ
ごなり。

五ツの禮を知
るべしといふ
御話し之元

五ツいづれのかたもをなじごこ
しやんさだめてついてこい

此の何れごは五ツの禮をいづれご云ふなり、此の事はごう云
ふ事なら、人間は五倫五体なりされば五つの禮あるものなり、
五つの禮ご云ふは仁義禮智信を云ふなり、又地水火風空ご云
ふも同事、木火土金水ご云ふも同じ事也、此の五つの禮を世
界へ弘めるには、一に睦間敷心二に世界助ける心三に世界ご
の國へも其國の心に思ふ様に交際心、四に四方へ誠を運ぶ心、
五に何事も吾身勝手して強慾貪慾の無き様に、是第一に心定
めて此神を願ふ心になれば神より其心の理を受取るご云ふ事
なり。

六ツむりにでようごゆふでない

こゝろさだめのつくまでは

無理に何制供、斯制供言はん、皆銘々の心次第やで、親神は親の方から無理は言はん、人間は皆親に無理を與へる、不足與へる理なり、思案して見よ、親神の守りご云ふは眞一ツに十分の守り與へる與へるのは天の理やで、誠も出ず、悪氣も止ず、欲い惜いの根を切らず、慾高慢の心も離ず、隔心の根も切らずして、眞一つより守の無い親神に、又素直な守護する親神に、歪だ心で直ぐな素直な守りは出来まい、又此心ご云ふのは着物に譬て咄する、歪んだ体に着せる着物は、眞直

に成ろふまい、此の理を思案して直の守欲しくば直の心に改める也、又歪んだ心は歪んだ守り在るご承知せよご云ふ事なり。

七ツなか／＼このたびいられつに

しつかりしやんをせにやならん

心一ツの定め
方によつて結
構と不結天
地の差と成る
御話し之根本

なか／＼ご云ふは、心一ツで大きな善悪の理が現はれる事で、又世界中の人は皆一列は思案して見よ、又思案のうちにごうでもごふでも思案定めにや成らん道が有るで、是れはごう云ふ道なら、是れ迄でこは違ひ月日の心は元無い人間無い世界を始めたのも、無い食物與へたのも、無い文字を拵らへて弘

本の元たる理
を知らずして
只願ひ丈では
眞心に成らぬ
御話之元

九〇
めたのも、此度此世初めてから無い助けを教へるのも又無い
話を聞するのも皆同事やで、是皆月日の急込み一寸の事で無し、
萬事世界の心の切接さして十分の珍らし助けをさして暮さそ
うこの年限故、此の儘では何つても同守は無し、陽氣の心を定
めたら、此の世始めてから無い又此の上も無い十分結構の助
けに逢ふこと也、又人間心が蔓れば夢見た様に散るや知れん
で此の事を睭かり思案をせにやならん云ふ事なり。

八ツやまのなかでもあちこちと

てんりわ、うのつとめする

山云ふは、世界は八方八柱の神の世界、神之自由用で、世

界中を山云ふ、其中で勤するものも有れ供元を知りたる者は
無し、何ば勤めをしても、願ひを掛けても、元が分らにや何
にも成らん、世界並の信心でも、心が悪しきなら無に成ること
云ふなり、此度の天理の眞心は、尙是迄無い助け無い話を聽
て助かる、又世界を助ける道であるから、十分にこもこで訊
て、此元の理も道も聞いた上で、神に願を懸るなり云ふ事
なり。

身体世界六臺
の根の明なる
御話しの元

九ツこ、でつとめをしていれど

むねのわかりたものはない

人間の胸をむね云ふ、元は人間は六臺の借物なり、其の理

九二
で息女供息子供云ふ、むつまじい云ふのもむね云ふのも
同じ理なり、胸が分れば萬事皆分らにや成らん、思案して見
よ、此の世に住みながら、此の世の事が分らん云ふのは、
雨の降るのも、風の吹くのも、地震も津浪も、山崩も、雷も
知るふまい、知らぬ筈のここ吾身の内でさへ、目の光はごう
云ふ理やら、又見へんのはごう云ふ理やら、食物たべるは何
ご云ふ理で喰るのやら、又何ご云ふ理で喰られぬのやら、又
何ご云ふ理で出るやら、又ごう云ふ理で出んのやら、又何の
理で瘠せるやら腫れるやら、又寒く成るやら、暑くなるやら、
薩張分るまい、夫れでは何程勤めしたごて何にもならん、此

元の理を委しく聽て、心に定めるのが、慥な眞心ごいふ事な
り。

とてもかみなをよびだせば
はやくこもとへたづねだよ

尋出よごいふのは、こもごへ訊ねて十分に吾身も世界も十分
に元を聽定めて、其の事を第一ごして、眞實有れば誠がある
誠があれば、世界よりみな人が集まる我身も誠を聞て世界へ
も誠を盡し根本で聞いて又聞かせば根本も同じ理があるごい
ふ事なり。

十下リ目

腹の立合恨合
は吾身を悪と
思はん故なり
其御話の元

一ツひとのこゝろといふものは
ちよとにわからんものなるぞ

人間はあざない者で、悪しきの人でも善き事が有る、善き人にも悪しき事が有る、夫れを知して、互に悪しき事はかりを思ふて腹を立合又恨み合するのが皆埃りやて又親神へも吾身の悪しき事を思はず、唯々善き事計りを思ふて、利益が無いと愛想を盡し、又他人はあれだけ悪しき人でも助かる事を疑念する心は第一の埃、又助けするにも其の通り、此の人は

善人やのに利益が無いと思ふ心は皆違ふ、神は四方正面隔て無し、窪い處へ水の寄る通り考へて、懺悔するにもさすにも其の心得を第一に定めて懺悔する心を慎み、又さすにも其心得で考へてからさせよと云ふなり。

二ツふしぎなたすけをしていれど

あらはれでるのがいまはじめ

不思議な助けとは、人間の体は不殘神の借物、神の自由用、息迄で神の借物、世界も借物、立毛も神より與へもの、夜晝の區別も、又咲花も、吹く風も、降る雨も、天氣も、皆神の守護なり、其世界に住む人間は是迄で何も知らずに、吾体を

月日の大恩と
吾身の親の大
恩を忘れたる
者又知ざるも
の泥なり其の
御話し之元

吾物ご思ふて居ながら、体の惱はごう云ふ事やら知らず、年
月を暮して居た、夫れを此度、身の惱みは申に及ず、其外世
界の難も、咄一條で皆助かることを天理に引合せて懺悔をす
れば、速に助かるは皆人間の埃りからなり、此の埃は銘々の
強慾貪慾の心が顯れ出るご云ふ事なり。

二ツみづのなかなるこのごろを
はやくいだしてもらいたい

水ご云ふは、世界中は皆水の中なり、世界は皆すなをなり、
其中に住む人間の心を泥ご云ふなり心ご云ふのはごう云ふ物
なら、唯人間は食ふ丈けご着る丈けごで、慾はいらん、其外

身体自由用之
恩を真に思へ
ば足納が出来
て楽しみ極ま
る御話し之元

世界中は皆兄弟互助け合ひ真心が天の理なり、夫れを知らず
して足るごを知らず、何んばふでも足らん足らん心が募
り出る故に、十分に守護下さる親神の御恩を知らずして、日々
心いずめて、恩有る親神を恨むる心が、人間の吾子を育てる
のも同事、恩有る親神を恨みて暮すのも、又親神の恩を忘れ
て暮すのも同じ事、此れを皆泥ご云ふ是れを迅出して仕舞へ
ご云ふ事なり。

四ツよくにきりないごろみづや
こゝろすみきれごくらくや

慾は金銭田地山林積る計りが慾ではない、其の外に慾が有る、

世界は皆兄弟難造な人も有る、身に不足の不具も在る、夫れを思はずして、満足で暮して居れば醜と云ふ心、又容貌が良くば阿呆やと云ふ、又賢ければ變人やなまくらやと云ふ、氣が短い、又酒を呑むと云ふ、氣口が合わんと云ふ、皆段々に足る事を知らずして、銘々に血を分けた親子兄弟夫婦の中でも、夫れ丈けの心の募りがある、又人間心を澄み切れ極樂やと云ふ事なり。

五ツいつくまでこのことは

はなしのたねになるほどに

今迄で世界の人間は皆凡夫心で、吾身さい良ければよい様に

思ふて埃りを着けて暮す故、身体も悩む不事災難も重る、世界も迫りて、身の不自由して難儀も重なる、是から此の神様の御咄し聞て、慾高慢無く、物案じも無く、隔も無く、心澄して暮せば、身の悩もなし、若死にする事もなし、火災水害も無し、年々凶作もなし、何處へ行け供小使入ず、人に難儀差すにも差し様無く、難儀仕様にも難儀無し、心次第で定め着るご云ふ事なり。

六ツむごいことばをだしたるも

はやくたすけをいそぐから

惨いご云ふのは、人間体は六臺の神の借物なり、其の体に肥

身体肥する原
因天理人道之
要之御話の元

難儀之原因を
知つて心改良
する御話の元

100
するここを六肥云ふなり、肥云ふのは心の肥、人間は皆
神の細物、神の子なり神の自由用なれば、何叶はん云ふ事
なし、叶はん云ふのは立毛作るも同じ修理に肥が脱けるも
同事、人間の修理肥は心を研くのが肥なり、此研は慾も隔も
無き様高慢もなき様、先案じもなき様、何事でも出す事は先
にして、吾身に着ける事は後を樂しむ心で暮せば天理なり、
人間の道なり、此の理を迅く心を定めよ云ふ事なり。

七ツなんぎするものもこゝろから

わがみうらみであるほどに

難儀云ふは、國常立尊はな也月様なり此の神様は此の上も

無き淳直な御心、又世界中は陰日向もなし眞直な心の大きな
御方なり、人間は夫れを知らずして心の小さい、氣の短かい、
慾深い懸隔の深い、恨み心の深い、案じ心の深い、足る事を
不知ぬ者なり、夫れて眞直な心の大きな、隔の無い親神様の
心合はぬ故、當る處が身体の惱成り又不事災難成り又
世界の難成るのも、皆銘々の心柄吾身うらみで有程にこい
ふ事なり。

八ツやまいはつらいものなれど

もとをしりたるものはない

病は八柱の神は世界の守護下さる八方の神なり、人間も八

病煩不事災難
原因を聞て心
改良之御話し
の元

柱の神の守護なり、自由用なり、其の神が廻るで病ご云ふなり、世界の水難、火難、作る立毛に虫がつき又大層な風吹き
の難も在り其八柱の神の廻るご云ふのも、人間の八つ埃の強
い故なり此度神様の御話聞て欲しい、惜しい、可愛、憎い、
恨み、腹立、嘘、追従の無き様にして、世界中の人を兄弟ご
心に定め、眞實に互助合ひの心に定めかへて見れば、身の惱
みも世界の難も皆助る事が分れば、難儀するのにも心柄吾身怨
みご云ふ事は銘々速に分るごいふ事なり。

九ツこのたびまでは一れつに

やまいのものとほしれなんだ

此の世に住み乍ら身体の自由用仕て居るのも何にも不知に暮
して居た此度神様の借物聞いてみれば身の内の自由用も、息
も、世界も、皆借物なれば我物は無し、親神様の心に叶はん
人間心で埃りを着る故身の惱ごなる、皆銘々の心通が現はれ
て身の惱ごなるごごを感じて病の原因は知れなんだご云ふ
なり。

十ドこのたびあらわれた

やまいのものとほこゝろから

ごうごごは、十柱の神の十分の心の働き、十方へ目のつく處
なれば、人間も平日身の悩むごきは、吾れ程善き者は無様に

思ふて暮す中に、神様の話に迫りて助かる事が分りたなら、
十ド吾心の心得違ひに相違ない云ふことなり。

十一 下り目

一ツひのもとしよやしきの

かみのやかたのちばさだめ

生屋敷云ふは、地場は申に不及、始めた屋敷正しき屋敷、
又世界中も正しき屋敷、人間も正しき借物、神のやかた云
ふは地場は神の地場、屋敷は神の八方の事を云ふて在る、又
世界中の人間の躰も月日のさいぶつ、其の躰を地場云ふの

は、人間の心なり、心の懺悔をして月日も替らぬ位いの心に
入れ替て、澄しさいすりや、其の者に月日が入り込んで、ご
んな御守護も被降る事なり、夫れで心を澄して銘々に神の自
由用を受る心に入替へて、世界助ける心の人、神の地場ご
同事なり、其の心の者が殖る程、神の館の弘まるご同じ建合
になる事なり。

一ツふうふそろふてひのきしん

これがだい、ちものだねや

夫婦ごは女夫が心を合せて真心する丈けのここでは無い男は
男の風、女は女の風、兄は兄の風、弟は弟の風、親は親の風、

家内事情陸間
敷修める一名
一人心の風と
云ふ御話の元

二〇六
子供は子供の風、是れは銘々の心の風くを云ふ、男は月様の如く何事も心を素直に濫利にして、家内を育てる心なり、女は日様なり、日々夫の心に從て、誠の勤をする心を定め、兄は身下を憐み、姉は妹を憐み、親は吾子を憐み、子は親に孝行を盡し、家内中其の心を合せて、睦間敷暮して、其の心で世界中も互に誠を盡し合の心を定めるのが物種やこいふ事なり。

荷を持つ丈け
で無し

三ツみればせかいがだんくくと
もつこにのうてひのきしん

世界は段々ご神様の話しを聞いて、此春こいふのは、此もこ

のこうを感心して、何も心に荷ふて忘れぬ様、定め着けたら、人にしんごい事はさせぬ様、我身がしんごいことする様、其しんごいご云ふは仕事丈けでは無し、荷を持つ丈けでもなし、只何事も誠を盡し人を助けるのは、人の荷を助すけるも同事、吾身が誠を盡せば、人の荷を持つも同事、是れを日之寄進こいふなり。

四ツよくをわすれてひのきしん
これがだい、ちこゑとなる

慾こいふのは、此の世の苦なり、此の世の苦こ言へば世に迫る事を苦こいふなり、世に迫る原因こいふのは、皆人の心か

吾身の迫りは
慾が原因なり
ご承知する御
話しの元

一〇八
ら迫るご云ふ、人はごうでも我さいよくば良い様に思ふ心が
皆人の迫りごなる、人も亦其心があれば吾身の迫りに成る、
思案して見よ、吾身柔に成れば、人も柔かに世界も柔か、吾
身の心が大きに成れば、世界の心も何事も大きになり、世界
大きに成れば、世に迫らん、世が迫らねば世の苦はなき者な
り、世の苦が無ければ慾を知らんごいふもの也、何事もよく
に迫るは、吾心からご篤ご思案して、吾さい能くば能いご思
ふ心を忘れて仕舞たら、世界の日之寄進ごいふ是第一の物種
ごいふ也。

五ツいつくまでもつちもちや

まだあるならばわしもゆこ

此の土は、人間の身体の肉を土ごいふ、此の肉を持には、身
の内が惱んでは持たれよふまい、身の内の悩みは心の埃一つ
に止まる、其肉を何つ迄でも持ちたくば、埃何んぼでも懺悔
すれば、身体の内も何つ迄でも持たれる物で有る、又世界中
も其の懺悔して善心の心を定めて居れば、世界に離れる事な
し、すれば其の土地々々の暮しがご迄も廣う出来る心を土
持やごいふて有るなり。

六ツむりにとめるやないほどに

こゝろあるならたれなりと

此の道は無理に勧めもせず、又此道の心有る者を止めるや無い程に、誠の道は天の理御助けの元、身の惱てなし世界中の助け道、高山から谷底迄みな助かる事を知らずして、高山から谷底も平地も隔はなく、助け心の物種を止る心で居るものは、吾身止まるご承知せよ、何ほご高山でも、谷底の水で崩れるごいふは此事なり、世界中皆承知して居よ、谷底の細水でも、月日自由用切れめなし、高山でも崩れたら姿は有舞、此事はごういふ事なら、月日退く呼吸はあろまいごいふ事な

り。

七ツなにかめづらしつちもちや

これがきしんとなるならば

屋敷ごは八柱の神の屋敷なれば、世界は皆屋敷、其の理で銘々家の下を屋敷ごいふ、其所に住む人間の身体も皆神の屋敷、此の屋敷の土ごいふは、身体の内をいふなり、其の肉を減して迄も、人の爲や世界の爲めに心を盡し、又銘々屋敷がへる迄物を惜まず、種を蒔き心を盡す事ならば、天理に叶ふて、屋敷の姿を失ふても、一夜の間にも天より御與へ被降る、屋敷は廣ふて身体の屋敷も、十分に陽氣で、永く居られるごい

眞誠に盡し果
たる者の樂し
み之御話し

ふことなり。

八ツやしきのつちをほりとりて

ところかへるばかりやで

此屋敷は銘々の心得違、八ツの心得違ひのしきを屋敷といふなり、此心得違ひの埃を、速に掘り取りて懺悔をすれば、所替る許りやといふ、是は十柱の神が銘々の心の頃合に乗つて、十分に御守護下さる許りやといふなり。

九ツこのたびまでは一れつに

むねがわからんさんねんな

胸といふは、六臺の神の借物の根が分らん故、身に惱みを受

けて、愁、災難に遭て暮して居た、此の度親様の御話しを聞いて、懺悔をして、六臺の借物の恩を忘れず、又信心といふても拜む許りや頼む許りや參る許りでいかんといふ事が分り、參らいても親様の教の通り心を定めて、互に助け合ひの心一つで、十分何事も叶ふ事を、肥を置ずに作り取りといふ事なり。

十ドことしはこゑをかす

じゆぶんものをつくりとり

やれたのもしやありがたや

十分の理が分りて、十分の心を澄せば、十分の守護を受けて、

身体も世界も、何でも難儀といふ事なしといふ事なり。

十二下リ目

一ツいちにだいくのうかゞいに
なにかのこともまかせをく

大工といふのは、元神の社から一に渡すのを大工に渡すといふ、其大工より、天から御諭被降る御話しを、其實に行ひ、心を定めて、世界を助ける心の人は、誠に大きな苦なり、是れも大苦といふ、此の苦を厭はず、不忘して、人間や世界を助けたいと思ふ心の者を、神が守護して、如何なることでも

事情伺ひと身
上伺ひとの御
話しの元

助けさすといふことなり。

一ツふじぎなふしんをするならば

うかゞいたて、ゆいつけよ

不思議な普請するならば伺ひ立て、言ひ付けよごは、紋形の無い普請するのは、伺ひ立てするがよい、又身体のみしんも心の懺悔、又心の定めを精一杯に盡して、分らん時親にもたれて伺ひ立て、又其伺ひの御言葉を悟りて、懺悔さす事を言付けよと言ふ事なり。

速かに心改良
すれば如何な
る悪人でも神
の用木として
被降る御話し
の元

三ツみなせかいからだんぐと

きたるだいくに、をいかけ

來る大工ご云ふは、寄り來る人に隔ては無けれど、其來る人の心に隔がある、隔てご云ふのは何んば悪氣強慾な者でも、一夜の間にも心入替へて、其の心を生涯忘れぬ者は、是を大工ご云ふ、匂ひごいふのは、月日兩神が心を寫す處を匂ごいふ、又是れを大工ごいふ細工するごいふ、人間も心を損じて体を損じ心の懺悔さして、軀を自由用差すのを大工ごいふ、是れを大工ごいふ是匂がけごいふなり。

四ツよきとをりよがあるならば

はやくこもとへよせてをけ

棟梁ごいふはごういふ事ならごうりようごは十方のりよなり、十方ごあれば人間も世界も十分の理世なり、十分のりよなれば十分心を定めて、十分世界を助け、十分人の難澁を憐みて、銘々も自由用自在の守護を受る者を寄せて置けごの事なり。

五ツいづれとごりよがよにんいる

はやくうかゝいたて、みよ

四人ごは神は四方面一ご目に助けたいごの思召で、よにん

と云ふ、又余人とも云ふ、余人といふのは澤山に其の心に適ふた者がいるといふ事なり。

六ツむりにこいとはゆわんでな

いづれだんぐつきくるで

無理に何制供斯制供言はん、六つか敷と思へば懺悔しても心定めしても、何にも成らん、又神は睦の守護、睦の世界成れば、又人間も六臺の借物で有れば、睦の守護に、睦の心は、無理で有るまい、六ヶ敷有るまい、其むねも分らずして、六ヶ敷思ふは、銘々隔心がある故に、吾心で六ヶ敷なる、仕易い事が六ヶ敷で、無理な事が仕易いと思心、親は何制供斯

制とも言はん、又助けするにも其の通り、無理な懺悔は差すに及ばず、何れ後悔する日が出来る事なり。

七ツなにかめずらしこのふしん

しかけたことならきりはない

何か是れ迄で紋形の無い話を聴いて、人間の助けをするのに、人間心を執らすのは六ヶ敷い、人間は凡夫心と云ふ、凡夫心は思ひ事の多い物、其心をすつきり執らすは仲々一寸の事ではなし、一寸執りても澤山着る、又着けたり執つたり執らしたりする心を定め差すのは、仲々容易でいかに云ふ事なり。

凡夫心之改良
容易でいかに
御話し之元

八ツやまのなかへとゆくならば

あらかきとつりよつれてゆけ

山やまと云ふは、世界中せかいぢうの凡夫心ぼんぷしんで天理てんりの道みちを知らぬ者を山やまと云ふなり、其所そのところへ助けに行く大工だいこうは粗あららき棟梁どうりやうと云ふ、細こまかい温和おだやかな咄はなしでは聞き分け出来ぬ、聞分け出来ぬは懺悔ざんげが出来ぬ、懺悔ざんげが出来ぬは神かみも助けが出来ぬから、粗あらい咄はなしでも聞分けて粗あらい懺悔ざんげをした丈だけでも神かみは助けたいこの手引てびきで、利益りやくを渡わたそうこの事を云ふなり。

九ツこれはございくとつりよや

たてまいとつりよこれかな

天理之御話し
を充分説き教
へる御話の元

小細工こさいくと云ふは、神かみの道みちも知り、理りも段々だんだんと聞き分け、心を定さだめて、人ひとをも助けて居る中に、心こころが違ちがふて、身体からだの違ちがつた者ものに、懺悔ざんげ差すのは粗あらい話はなしではいかん、理りの理りを教へ、元もとの元もとを聞きし、道みちの道みちたる所以ゆゑを論ろんし會得かえとくせしめ、誠まことの有無あやなしを調しらへて、本もとの元もとを教へて、世上せじやうの理りと天てんの理りとを引ひくらべ説せき教へ、何なにに付けても抜目ぬきめの無なき様に論ろんする者を小細工こさいく棟梁どうりやうと云ふ、此この心こころに磨みがきに研ひぎを掛かける者を是これ飽あと云ふなり。

十じゅうドこのたびいちれつに

だいくのにんもそろいきた

此このとうごは如何様いかやうの事ことも、神かみの自由用じゆうようの通とほりに道明みちあけを差

す人数も、皆夫れくに國々所々に出來たち來る事を云ふ事なり。

一一一

大正十四年十一月十日第一版
昭和二年一月二十日第二版
昭和三年四月二十日第三版

編輯者 奈良縣丹波市町三島 安江



發行者 天祐社
代表者 安江明

印刷人 淺野好三郎
神戸市布引町二丁目二十三番屋敷

印刷所 白馬堂印刷所
神戸市布引町二丁目二十三番屋敷

317
683

終

